

富岡製糸場と深谷人

「最終回」

富岡製糸場建設の立役者

渋沢栄一

渋沢栄一は、血洗島村（現在の深谷市血洗島）の農家で生まれ、生家は農業の傍ら養蚕業にも力を注いでおり、幼少の頃より「養蚕」に親しんでいました。

いとこの尾高惇忠から論語を学んだ栄一は、若くしてその頭角を現し、幕府の役人になり、慶応三年（一八六七）一月、徳川慶喜の弟昭武のパリ万博訪問に随行し、欧州主要国で見聞を広めていきました。

江戸幕府倒壊後に帰国した栄一は、大隈重信らの誘いで新政府に登用され、明治三年（一八七〇）五月には「富岡製糸場設置主任」に任じられました。これは、海外との競争の中で低迷を続けていた養蚕・製糸業を、世界水準のヨーロッパ式器械製糸技術を導入することでの立て直しを任されたことを意味しています。

栄一こそが、農民出身で養蚕の現場を知っていること、また国際経験があり、世界的視野に立つて養蚕・製糸業の立て直しに当たることができると見込んでの抜てきでした。

栄一は、フランス人技師のポール・ブリュナの技量を見極め、工場建設に関する契約を決めました。その後、もともと養蚕業が盛んであった富岡にフランスから大型の繰糸機を輸入し、海外の工場と比べても決して引けの取らない設備を整備した「富岡製糸場」が誕生したのです。

その後も栄一は精力的に活動し、生涯に関わった会社の数は富岡製糸場も含め、約五〇〇とも言われています。平成二十六年六月、世界文化遺産となった「富岡製糸場と絹産業遺産群」をはじめ、郷土の偉人渋沢栄一の



▲渋沢栄一記念館北側に立つ渋沢栄一像は深谷の繁栄を祈るように立っています

功績は、現代にたくさん残っています。まさに栄一は、「富岡製糸場建設の立役者」であり、「日本資本主義の父」であったのです。この「富岡製糸場と深谷人」は、今回で終了します。富岡製糸場の場所は群馬県の富岡市ですが、工場建設から操業開始までの創業時期に、渋沢栄一、尾高惇忠、荏塚直次郎、堀田鷲五郎父子、尾高勇、松村和志、関根照など多くの深谷市出身者が活躍したことを、知っていただければ幸いです。

（文：荻野勝正）



渋沢栄一

渋沢栄一は深谷市出身で明治政府の大隈重信・伊藤博文等から製糸場建設の命を受け、フランス人のポール・ブリュナを雇い入れ、日本最初の大規模器械製糸場の生みの親として活躍した。

昭和6年（1931）91歳で没。

（『富岡製糸場「絵手紙かるた」』NPO法人富岡製糸場を愛する会 より）

市長の深い話

深谷市長 小島 進



将来を見据えて

北海道夕張市。メロンの産地として有聲で、かつては炭鉱のまちとして繁栄しました。その夕張市が平成19年に財政再建団体となり、事実上、財政破綻しました。企業ていえば「倒産」です。この事実が明らかになったとき、「自治体が破綻するなんていうことがあるのか」という声が聞かれました。でもよく考えてみると、日本には1000兆円を超える借金があります。夕張市が抱えていた問題は、実は日本という国だけではない、多くの自治体が抱えている大きな問題なのです。

自治体の破綻について夕張市の

鈴木市長が、「今まで当たり前で空気のようだった行政をいやでも意識します。身を切ることも徹底的にやったけれど、まだ足りない。だから市民に負担してもらっている」とおっしゃっているのを拝見しました。これは、市が抱える借金の返済のために税金や行政サービスに係る料金が値上げされるのにもかかわらず、行政サービスの提供は最低限にとどまり、結果として、市民の負担ばかりが増えてしまっていることです。

となると、深谷市の状況が気になると思えますが、幸い深谷市の財政状況は現在のところおおむね健全です。ただ、このまま何も対策を取らなければ、財政破綻はなにしろ支出が収入を上回る赤字財政になりかねません。

行政サービスに対するニーズがより複雑多様化することが予想される中、必要な行政サービスを供給していくことは大切です。今後、財政状況は厳しさを増していきませんが、次の世代へ過大な負担を残すことなく、そして、将来赤字財政とならないために、今やらなければならないいけないことにしっかりと取り組んでいきたいと思えます。

ありがとうの手紙



優秀賞

一般の部

孫育てをしてくれる父へ

上柴町東 村原美也子 さん

思春期の娘と反抗期の娘と戦う更年期の私。働きながらの子育ては気力体力共に疲れ、娘達に理不尽に怒る日も多々ありますが、反抗期の娘も負けずに挑んでいきます。両親共いれば、叱り役、宥め役に対応できますが、母親の私だけなので戦闘態勢も衰えません。そんな時父は、娘達にわかるように諭してくれます。娘が素直に謝ってくれるのは父の支えがあってこそだと思います。娘達を見守り、一緒に育ててくれる父に心から感謝しています。ありがとう。大切な父へ。



優秀賞

一般の部

孫へ

中瀬 川田竹子 さん

疲労骨折が続き、退部を勧められたのに野球部に残りたい一心で、マネージャーを志願したね。朝は早く帰宅は夜中に近い、母屋に住む私は雨戸を開けて待つ。「ばあーちゃん心配なくても大丈夫」の元気な声、「大変だね」には「前進だよ。頑張るよ」と返してくれる、その力強い言葉に私も元気が出るよ、そして反省もしているよ。年寄りだからと断ってきたことを、これからは、篤広のように、前向きに行動するよ。孫よ、元気・英気をありがとう。感謝、感謝です。